

# 西ドイツにおける観光・レクリエーション地理学の研究動向

石 井 英 也

- |                                |                      |
|--------------------------------|----------------------|
| I はじめに                         | 1) 観光・レクリエーション地理学の再興 |
| II 第2次世界大戦前における観光・レクリエーション地理学  | 2) 観光・レクリエーション地理学の確立 |
| 1) 観光レクリエーションの発達と地理学の対応        | IV 最近の多様な研究傾向        |
| 2) 観光・レクリエーション地理学の萌芽           | 1) 観光地理学研究           |
| III 第2次世界大戦後の観光・レクリエーション地理学の発達 | 2) 近接レクリエーション研究      |
|                                | 3) 地域計画を指向した研究       |
|                                | V おわりに               |

## 1 はじめに

工業社会の進展に伴う都市化や技術革新によって、人間のモビリティや自由時間はたえず増大しつつあり、現代の福祉社会では必然的にレクリエーション機能が重要になってきた。地理学的に有意なその特性の1つは、労働、居住など人間の他の基本的な機能と同様に、空間を必要とすることにある。つまり、レクリエーション機能にもとづく新しい景観と空間関係は、人間の変化する生活様式の1つの反映ということになる。そこで地理学的観光・レクリエーション研究とは<sup>1)</sup>、人間のレクリエーション機能に由来する空間的諸現象、すなわち空間組織型と空間組織を形成するプロセスの科学といえよう。

空間的側面が観光・レクリエーション地理学の前提になるというこの考えから出発すると、観光・レクリエーション空間における諸現象の分布、それらと自然的基礎や他の人文地理学的諸現象との相互関係に関する構造・プロセス分析、つまり景観形成研究や観光・レクリエーション現象の空間組織に関する研究などがその重要な課題となろう。

第2次世界大戦後、観光・レクリエーションの飛躍的な発展に伴い、とくに先進諸国では、この現象の地理学的研究の必要性が高まってきた。このような背景のもとで西ドイツでは W. Christaller<sup>2)</sup>、K. Ruppert と J. Maier<sup>3)</sup>、オーストリーでは F. Jülg<sup>4)</sup> スイスでは P. Defert<sup>5)</sup>、イギリスでは、P. Lavery<sup>6)</sup>、アメリカ合衆国では K. C. Mcmurry<sup>7)</sup>、カナダでは R. I. Wolfe<sup>8)</sup>、わが国では青木・山村<sup>9)</sup>らによって、この現象に関する研究の必要性を喚起するものや、ある程度研究の整理を試みる労作が著わされてきた。

それらを比較してみると、観光・レクリエーションに関する研究も、当然のことながら各国によってその研究動向が若干異なっている。たとえば、アメリカ合衆国では、大都市との距離関係から、観光・レクリエーション地の立地、規模、形態、性格などを一般的に把握しようとするものや、地域計

画と結びついた、将来のレクリエーション需要の予測や景観評価の研究などが盛んにおこなわれてきた<sup>10)</sup>。それに対して西ドイツでは、観光を消費としてとらえる傾向が強かったため、従来、観光形態、季節性、滞在期間などを指標として観光のパターンとその地域的特性を追求したものや、一方では、長い人文地理学の伝統の上になった、集落地理学、あるいは社会・経済地理学的観点から地域形成を扱ったものが多かった。しかし、このような比較に関しては、別の機会に論じることとし、ここでは西ドイツにおける観光・レクリエーション地理学の発達を展望する。

西ドイツの地理学における観光・レクリエーション研究は、他の諸国と同様、一般に地理学のなかでは必ずしも発達した部門とはいえないのが実状である。しかし、その歴史は比較的早く、しかも第2次世界大戦後その研究数は飛躍的に増加し、観光・レクリエーションに関する多くの知識が蓄積されてきた。そのうえ、今日人文地理学の複雑な研究動向<sup>11)</sup>と歩調をあわせて、観光・レクリエーション研究の傾向も、既述のように単純にはいいあわせえないほど多様化してきた。そこで、従来わが国ではあまり紹介されてこなかった西ドイツの観光・レクリエーション地理学の発達、最近の研究傾向、若干の問題点等を述べてみることにする。なお、必要な限りにおいて、オーストリー、スイス、東ドイツの観光・レクリエーション研究についても若干ふれることにする。

## II 第2次世界大戦前における観光・レクリエーション地理学

### 1) 観光・レクリエーションの発達と地理学の対応

ヨーロッパにおいて、近代的意味での観光は、ブルジョア階級による温泉旅行の発達によって18世紀後半から広まってきたが、休暇旅行が一般に普及してきたのは19世紀後半のことである<sup>12)</sup>。伝統的な農業社会から近代的特性をもつ工業社会への移行が遅れたドイツでも、同じ頃、温泉旅行のほか、ロマン主義運動にもとづく画家や詩人達の旅、探險的色彩の強い登山の興隆などの形をとって、観光が発達してきた。これらは、社会的特権階級によって行なわれたが、この頃一方では、人口の都市集中に伴い、より広範な階層の人々によって、都市の周辺で、いわゆる近接レクリエーション(Naherholung)活動が行なわれるようになった。休暇が法的根拠をもち、レクリエーションが多くの人々に行き渡るようになったのは、今世紀に入ってからである。旅行の解放は、ホワイトカラーで1920年代、下層労働者にとっては、やっと第2次世界大戦後実現された。それゆえ、真に今日的意味での観光・レクリエーションの発達は、早くもせいぜい1920年代以降のものと考えられている<sup>13)</sup>。

このような背景のもとで、観光・レクリエーション現象は、一般に地理学の分野でも僅かにしか顧慮されてこなかった。しかし、1841年に、すでに1人の地理学者・J.G. Kohlsが、観光の集落形成に対する影響力を指摘した<sup>14)</sup>。後に地理学における観光研究について、文献研究を行なったR. Samolewitzによれば<sup>15)</sup>、これが地理学で最初に観光について言及したものとされている。

その後、観光・レクリエーションの発達に伴い、行楽地、温泉地、通過観光地などでその経済的意味がますますつれて、旅行案内の類の出版物が多くなった。地理学以外の分野も含めて考えると、イタ

リアやスイスでは19世紀末頃から本格的な観光研究が始まったが、ドイツでは20世紀に入ってからであった。

1902年には、A. Hettnerが<sup>16)</sup>、都市の成長に伴い必然的にレクリエーションの需要が高まり、それによって既存の温泉地が構造的に変化するばかりでなく、新しいタイプの観光・レクリエーション地が出現することを指摘した。A. Hettnerのこの洞察は、K. Hassertに引き継がれ、発展した<sup>17)</sup>。彼は、温泉地、避暑地、保養地、巡礼地、学芸地など、観光・レクリエーション地のタイプを確認し、それらの立地を都市住民のレクリエーション需要、自然条件と両者を結びつける交通条件から説明し、それらの地域の特殊な景観を明らかにした。このように、この期には観光・レクリエーション現象がまだそれほど顕著でなかったために、この現象に関する研究は、局地的地域性を明らかにしようとする地誌的集落研究の一環として考えられていたとみることができよう。

## 2) 観光・レクリエーション地理学の萌芽

観光・レクリエーション地理学は、当初、他の学問分野の観光研究から強い影響を受けながら発達してきた。観光地理学という概念も、経済学者といえるオーストリーのJ. Stradnerによって<sup>18)</sup>、初めて明確にされた<sup>19)</sup>。彼の一連の研究は経済学の範疇に属するものであったが、彼はまた観光地域の分布図作成を企図し、それを位置、自然、文化などから多面的に考察し、観光の本質をみきわめるべきことを主張し、これを観光地理学の課題とした。彼は、観光に関する事実を体系的に説明しようとする努力したことで高く評価されているが、その着眼点は実に地理学的なものであった。

第1次世界大戦後、オーストリーのK. Sputzは、集落景観形態論の上に立って、チロール地方において、観光地域成立の条件と、観光と他の人文地理学的現象間の相互作用に関する本格的な研究を行なった<sup>20)</sup>。後にこれは、G. WegenerやA. Grünthalなどのベルリン学派を通して、ドイツの観光地理学の発達に寄与したといわれている<sup>21)</sup>。

1929年にベルリン商科大学にR. Glücksmannを所長とする観光研究所が設立された。これは、経済学、商学、法学、社会学、地理学、気象学、医学などさまざまな観点から観光現象を体系的に把握しようとする最初の試みであった。そして機関紙としてArchiv für den Fremdenverkehrを刊行した。この研究所設立の年にすでに、G. Wegenerは観光現象を地理学的に扱う意義に関する論文を発表した<sup>22)</sup>。彼は、地表上の場所の総体を与えるのが地理学の課題であり、それゆえ場所によって異なる地域のなかから観光地を見出し、交通・自然などその成立の条件、観光現象とその地域の景観・文化構造との相互作用を考察するのが観光地理学の目的であるとして、一連の基本的調査を行なった。A. Grünthalは、さらにその上に、レクリエーションに適する場所や地域の自然的条件を検討する必要性をとくに強調した<sup>23)</sup>。彼はこのような観点から、主として温泉地に関する研究に取り組んだ<sup>24)</sup>。

この時期には、地理学以外の分野で、A. Bormann<sup>25)</sup>、F. W. Ogilvies<sup>26)</sup>、R. Glücksmann<sup>27)</sup>らによって、観光学を体系化しようとする努力がなされた。これらは観光学の基本的な著書とされているが、地理学者に多くの知識と刺激を与えた。

1939年には、H. Poserが観光地理学に関する意欲的な論文を発表した<sup>28)</sup>。彼は、観光地理学は他の経済、交通、集落地理学などと同様に、その空間的現象から出発し、その内容総体を課題としても

つものであると主張した。彼は、観光地理学の対象を、一時的に出現する観光客の集積とその環境との間に成立する交互作用の総体と明確に定義し、リーゼン山地における観光形態（温泉、避暑、ウィンタースポーツ、遠足、通過観光）とそれに結びついた地域的特性に関する研究を行なった。この論文は方法論について検討しているわけではないが、その観点はベルリン学派に近い。しかし、ベルリン学派のように、観光を過度に交通現象として捉えず、空間現象の解明を強調した。そのため、これは単に観光の文化現象を記述したばかりでなく、その空間的分布の法則性を追求するためのルールをひいたものと高く評価されている<sup>29)</sup>。このように、この論文は、問題設定や方法の点で、その後の観光・レクリエーション地理学の発展の基礎となった。

第2次世界大戦中、ドイツの観光・レクリエーション研究は衰退した。かわってスイスで観光研究が盛んになった。1941年にベルンに観光研究所が創設され、サンガレンの商科大学に観光学の講座がつくられた。これらは W. Hunziker と K. Krapf の指導のもとで<sup>30)</sup>、世界の観光研究の中心となった。地理学の分野では E. Winkler<sup>31)</sup> や H. Carols<sup>32)</sup> によって、観光地の分布やその立地類型に関する研究がなされ、地理学的観光研究の必要性や有効性が明らかにされてきた。また、この時期には、W. Strzygowski によって、ウィーン市民のレクリエーション空間に関する研究が発表された<sup>33)</sup>。これは、第2次世界大戦後盛んになった近接レクリエーション研究の先駆となるものであった。

### III 第2次世界大戦後の観光・レクリエーション地理学の発達

#### 1) 観光・レクリエーション地理学の再興

第2次世界大戦後、人間の観光・レクリエーション活動の大量化に伴い、この現象はさまざまな学問分野で一層注目されるようになった。1950年にはミュンヘンに、1952年にはフランクフルトに観光研究所が設立され、地理学的研究の発展に大きな刺激となった。

1950年代には、地理学の分野でも、筆者が確認しただけで、30以上の観光・レクリエーションに関する地理学的文献が発表された。ここでは全ての文献を列挙することはできないので、数多い文献のなかから、その後のこの種の研究に影響を与えたもの、あるいは一層の文献研究のために魅力的と考えられるものを選んで、観光・レクリエーション地理学の発達について述べてみたい。

まず、1951年に一連の温泉地の研究を精力的に行なったスイスの W. Voigt が、一向に進展しない観光地理学の体系化の必要性を言明した<sup>34)</sup>。彼は経済地理学的フレームワークのなかで観光地理学を体系づけるべきと考え、観光地の立地を厳密に検討し、その比較を通して一般化をはかるのが観光地理学の課題であると主張した。この考え方を更に進めたのが、1955年の W. Christaller の論文であった<sup>35)</sup>。彼は地理学的観点からヨーロッパにおける観光の発達を5期にわけ、12の立地類型を指摘し、スイスのヴェリス地方、ユトランド半島、シチリア島を事例として、場所的特性をもつ観光現象と観光地の立地を考察した。

W. Voigt や W. Christaller と観点は異なるが、H. Hahn は、西ドイツにおける観光・レクリエーション地の分布に関する基本的研究をものした<sup>36)</sup>。観光特性の分析からその地域的特性を追求す

る研究は、H. Poser 以来、西ドイツの観光・レクリエーション研究の1つの伝統となったが、彼は、海水浴場、温泉、保養地、その他という統計上の分類のほかに、収容力、宿泊数、季節性、滞在期間、外国人宿泊の割合などの統計を利用した複合的指標を案出して、西ドイツの観光・レクリエーション地の類型化を行ない、分布図を作成し、その地域的特性を明らかにした。彼は、機能論的見解、すなわち近接レクリエーションを含めて、都市との結びつきから観光・レクリエーション地域を明らかにするという構想をもっていたようだが、統計資料の不備によって、それには成功しなかった。

景観的に明瞭である、代表的な観光・レクリエーション地の研究も盛んになされた。たとえば、クライネン・ヴァルザー谷地方を扱った H. Jäger<sup>37)</sup>、海水浴場の発達した東ホルシュタインを扱った W. Wenserski<sup>38)</sup>、東フリージア島の臨海湯治場に関する G. Niemaier の研究<sup>39)</sup>、ダボスの変貌を論じた Ch. Jost の研究<sup>40)</sup>、フィヒテル山地とフランケンヴァルトにおける観光特性、観光の成立条件、地域に与えた影響を論じた A. Weber の研究<sup>41)</sup>などが代表的なものとして挙げられよう。これらは、長い伝統をもつドイツ人文地理学の景観論的立場にたって、観光・レクリエーションに関する地誌的事実を蓄積するという点で、非常に意味のある研究であった。とくに H. Jäger は、アルプ牧畜 (Alpwirtschaft) 地域がいかに観光地域に変貌してきたのかを、地域の全体構造的視点から詳細に論じ、H. Poser が示した観光・レクリエーション研究のもう1つの側面に関する研究法に1つのモデルを与えた。

近年の近接レクリエーション研究の発達の1つの契機となった R. Klöpffer の研究は<sup>42)</sup>、1955年に発表された。近接レクリエーションは、長期滞在を伴う保養や旅行ほど景観形成が顕著でなく、この現象に関する研究は、それまでほとんど関心をもたれてこなかった。R. Klöpffer は、近接レクリエーションの歴史的発達と現在の実状、レクリエーション地と人々の居住地との間の関係の変遷と現在像がさまざまなスケールで明らかにされ、それらの地図上での分析が早急にはからねばならないことを訴えた。彼のこの主張は、都市あるいは地域計画への地理学の寄与という観点からなされたが、彼はまた、レクリエーション地は、ある時代の交通条件によってその範囲は異なるが、都市を中心に発達していることを示唆して、この現象に対する地理学の関心を促した。

近接レクリエーション現象に関するいくつかの具体的な研究もあらわれた。たとえば、Chr. Borchardt は、ミュンヘンの市街地の発展、密度の増大、交通の発達や社会階層にもとづく都市の機能分化などと結びつけて、近接レクリエーション地の発展と変遷を確認し、一方近接レクリエーション地では農業経営の後退や家屋利用の機能変化がみられることを明らかにした<sup>43)</sup>。ドイツでは19世紀中期以降、シュレーパーガルテン<sup>44)</sup>あるいはクラインガルテンと呼ばれる、住居と分離した小菜園が、とくに恵まれない人々の休養、レクリエーションの場として重要な役割を果たしてきたが、その発達、機能の変遷、意義を究明するような論文もあらわれた<sup>45)</sup>。

このように、1950年代には、方法論上においても、あるいは具体的な研究においても、その後の観光・レクリエーション研究の発達と多様化を示唆するいくつかの重要な研究が発表された。

## 2) 観光・レクリエーション地理学の確立

## a) 観光地理学の確立

1960年以降、他分野たとえば社会学の分野では H. J. Knebel<sup>46)</sup>、経済学では A. E. Pöschel<sup>47)</sup>、P. Bernecker<sup>48)</sup> らによって、観光研究の基礎が確立されてきた。それらの刺激のもとで、地理学の分野でも、従来の観光・レクリエーション地理学を整理しようとする研究や、一般観光・レクリエーション地理学といったものをまとめようと試みる研究があらわれてきた。

1960年には、R. Samolewitz によって、それまでの観光地理学に関する文献研究が発表された<sup>49)</sup>。これは、観光地理学研究の流れを整理し、その課題を明確にしておこうとするもので、とくに第2次世界大戦前の諸研究を扱っている。オーストリーでも R. Rungaldier<sup>50)</sup> や F. Jülg<sup>51)</sup> らによって、その種の努力がなされてきた。

とくに F. Jülg は、その考え方において、とりわけ斬新であったわけではないが、それまで蓄積されてきた知識を豊富に活用して、観光地理学研究についてきわめて実際的な整理をはかった。彼は、観光地域の把握、観光地と観光市場あるいは観光需要発生地との交互作用の分析を前提として、観光地成立の条件、そこでの観光特性の分析、空間形成に対する観光の作用を研究するのが観光地理学の課題と考えた。そこで、彼は、観光地成立のための自然地理学的条件（地質、地形、水、気候、植生、動物界）と人文地理学的要因（集落、人口密度、宗教、歴史、政治、交通、観光施設と関連産業、農林業、エネルギー経済、工業）を示し、それら個々の要因の効力は場所・時代によって異なり、それらは密接に関連して観光とかわり合っているため、総合的に解明される必要があることを指摘した。さらに、観光の種類と形態、滞在日数、季節性、観光強度、観光客の社会構造などの観光特性に着目しながら、類型化を行ったり、観光が地域の観光施設の立地、産業構造、社会・文化景観に与える影響を究明するのが観光地理学であるとした。このように彼は、H. Poser の提起した枠組みに、その後のとくに経済地理学的業績を加味して、観光地理学を整理した。東ドイツでも、G. Jacob らによって、経済地理学的観点から観光地理学の体系化をはかろうとする努力がなされてきた<sup>52)</sup>。

しかし、この種の問題に最も精力的に取り組んだのは、なんといっても K. Ruppert と J. Maier であった<sup>53)</sup>。彼らは、それまで 10 年以上も観光やレクリエーション現象の解明に取り組み、モノグラフが数多く蓄積されてきたのをまのあたりにして、観光・レクリエーション地理学の方法を徹底的に検討する必要性を認識した。その際、彼らは、第2次世界大戦後西ドイツで盛んに議論されてきた社会地理学というフレームワークで、観光地理学を整理しようとした。

社会地理学とは、人間の基本的生存機能の合同劇から由来する我々の機能社会の空間的諸現象を説明するもので、人間および社会集団の機能の空間的組織型とその形成を研究する科学である<sup>54)</sup>。そこで彼らは、観光地理学の課題と対象を、人間の休養(sich erholen)という機能にもとづく観光空間の適合性や自然・人文地理学的特性の構造分析、および時代的推移のなかでの観光空間の形成と変化に対する、人間・社会集団の観光行為の諸作用力についてのプロセス分析と規定した。彼らは、従来の観光地理学的成果として、景観形成論的研究や地域特性を追求した研究の結果を整理する一方、従来の観光地理学的研究がある特定地域の観光現象の特性や分布の解明に力点を置きすぎたきらいが

あることを指摘して、観光と観光地ないしは観光地域間に存する交互作用と相互関係の把握、すなわち観光現象の空間組織、ならびにその地理的実体との間の地域的関係の把握を、早急に解明されねばならない重要な課題とみなした。

このような観点から、彼らは、観光地理学の手順と方法、観光地域の特性と類型化、将来のレクリエーション用地の需要、経済要因としての観光、空間組織と地域計画などについて論じた。その際彼らは、従来の成果を詳細に利用しながら、自然地理学的基础、人文地理学の局面、景観評価などの観光供給側からばかりでなく、景観変化を招く価値判断をする人間や社会集団に留意しながら、観光の種類、観光客の発地と社会構造、観光の史的発展など需要の側面からも考察を進め、総合的に空間的観光ポテンシャルを解明するのが観光地理学的方法であることを示した。彼らは、また観光地理学が、このような機能論的、総合的把握を通して、将来のレクリエーション用地の需要予測や地域計画にも寄与しうることを明らかにした。

#### b) 近接レクリエーション研究の発達

近接レクリエーション (Naherholung) とは相対的な概念で、比較的短期の、比較的小さな移動距離によって特徴づけられるレクリエーションのことである。西ドイツでは一般に、その時間的特性は数時間から週末の 2、3 日に至るもので、空間的には人口高密度地域からおおよそ 80~120 km の範囲内に顕著にみられる現象と考えられている。

近接レクリエーションに関する研究の必要性は、すでに R. Klöpffer, Chr. Borchardt, H. Hahn や、中心地とその周辺レクリエーション地との空間配置関係の把握に努めた W. Christaller ら<sup>55)</sup>によって主張されてきた。とりわけ短期のレクリエーションは、人間の生活サイクルを考えてみれば、誠に重要なことが明白であるが、統計データの不足や景観形成力が比較的弱いという理由などで、その研究は非常に遅れた。

K. Ruppert と J. Maier は、既に述べたようなレクリエーション現象の空間組織の研究には、近接レクリエーションの地理学的解明が欠かせないことから、社会学、経済学、医学などの他分野でのこの研究の発達といくつかの地理学的成果を背景に、この現象の研究法の確立にも力を注いできた。

彼らは、まず近接レクリエーションに関する文献研究を行なった<sup>56)</sup>。これは、その現象に関する研究を、グローバルな分析、その歴史を追求した研究、グリーンベルト概念にもとづく研究、経済・交通地理学的研究、別荘地に関する観光地理学的研究、農業と土地保全の観点からの研究、森林保護の観点からの研究、心理学的・社会学的研究、医学的観点からの研究と、いくつかの実証的研究、包括的研究に整理して、その進展を概観したもので、これによって彼らは近接レクリエーションに関する地理学的研究の基礎を提供した。

彼らは、ついで 1970 年には、社会地理学的観点から、近接レクリエーションの概念、その把握方法、いくつかの人口高密度地域における近接レクリエーション空間の大きさと意味や地域計画への寄与を論じた労作を発表した<sup>57)</sup>。これは、方法論を扱ったばかりでなく、ミュンヘンの近接レクリエーション空間を例に、詳細な構造分析を行ない、その空間組織と地域的意味を考察した。

近年、近接レクリエーションに関する事例的研究もその数を増し、K. Ruppert らにみられるよう

に、その体系化の試みが意欲的になされるようになった。

#### IV 最近の多様な研究傾向

前章では、1950年代の観光・レクリエーション研究の再興とその後の体系化への努力について展望した。体系化の試みが、豊富な事例研究の積み重ねの中で生じてきたことはいうまでもない。それゆえ、ここでは、1960年代以降の個別的研究のうち、おもなものをいくつか選んで、西ドイツにおける観光・レクリエーション地理学の発達を概観したい。

##### 1) 観光地理学研究

###### a) 概観的研究

大きな地域を扱った概観的研究としては、W. Ritter のヨーロッパの観光地域に関する論文が注目される<sup>58)</sup>。彼はヨーロッパの観光地域の分布図を作成し、それらが海岸、アルプスを中心とする山地域と大都市周辺の森林地などに発達していることを示した。一方、人口 20 万以上の都市住民の観光行動の調査によって、観光形態・立地条件や利用頻度を異にする 3 つの圏構造、すなわち 150 km 以内の近接レクリエーション地、150~500 km の小旅行圏、500 km 以上の大旅行圏がみられること、そしてそれらが交錯して観光地域が形成されていることを指摘した。さらに彼は観光地の条件、発達程度などから、ヨーロッパの観光地域には人口密集地域の北西ヨーロッパを核として、内帯・外帯・周辺帯という圏構造があることをも認めた。

J. Maier は、ヨーロッパの観光の特性、意義、分布などに関して平易な解説を行なった<sup>59)</sup>。また、西ドイツにおいて、郡 (Kreis) を単位地域として観光地の分布やその意義を論じた M. T. Brink の研究<sup>60)</sup>、あるいはバイエルン州において、観光強度、宿泊数、滞在日数など多くのデータを駆使して観光地の分布と変遷を扱った E. Grötzbach の労作<sup>61)</sup>なども著わされてきた。また、R. Klöpffer は<sup>62)</sup>、西ドイツにおける農家民宿の収容力に関する分布図を作成し、その空間構造の意味を考察した。しかし、このような概観的研究、すなわち大きな地域の差異や類型化に精力的に取り組んだ研究は、必ずしも多くはない。

###### b) 観光地域に関する事例研究

観光地域の事例研究は枚挙にいとまがないほどであるが、バイエルン州のテーゲルン湖周辺地域において、観光が地域に与えるさまざまな影響を解明した K. Ruppert の研究<sup>63)</sup>などが、まず代表的なものとして挙げられよう。彼は、1815年・1860年・1960年という 3 時期における土地所有に関する小空間の地図化 (Kleinräumlich Kartierung) を行ない、観光景観形成に大きな役割を果たした、時代によって異なる社会集団の抽出に成功した。彼はまた、農業・観光の特性ばかりでなく、労働力の季節性、就業構造、地価、地域の関係圏、集落景観などの特性をも仔細に検討し、よそ者 (Ausmärker あるいは Ortsfremder) の土地所有割合が高いことなど、他の地域と異なる多くの観光地的特性を明らかにした。

K. Ruppert はまた、ドイツアルプス地域において観光の作用力と景観変遷に関する一連の研究<sup>64)</sup>



を行ない、さまざまな形態の別荘や民宿 (Pension や Privatzimmer) の発達, 土地所有構造の変化, 牧畜小屋の観光施設への転用や賃貸, 社会的休閒地の出現, 農牧地の林地化 (Aufforstung), 飼育牛の預託, 観光とアルプ経済の共生関係, また, 塩の交易などの商業的要素が古くから導入された地域の強い観光地化などに関する具体的事実を指摘し, 観光の作用力と対応形態の地域的な差異を明らかにした。

アルプス地域に関しては, A. Kröner<sup>65)</sup> や J. Maier<sup>66)</sup>, W. Heller<sup>67)</sup> とも, それぞれ代表的観光地であるグリンデルバルト, ヒンデラング, ザルツカマーグートにおいて, 地域の発展のプロセス, 形態, 機能を全体構造的にアプローチした力作を発表した。J. Maier の論文は, モノグラフというよりも, むしろ小地域を包括的に把握するための方法論を確立しようとするものであったが, ヒンデラングという観光村の様々な特性を描きだした。一方, 海岸の観光や観光地については, K. Kulinat の詳細な研究<sup>68)</sup>などが発表された。S. Diekman は<sup>69)</sup>, 北部のシュレースヴィヒ・ホルシュタイン州において, 別荘集落の形成, 形態, 機能を地域の社会・経済的構造との関連から論じた。また, 方法論的な吟味はほとんどなされていないが, モーゼル地方における観光の発達, 種類, 成立条件, 観光の与える影響, 観光地域, 地域の観光関係圏などを徹底的に論じた J. Dodt の研究<sup>70)</sup>なども, この範疇に属する代表的なものとして挙げられよう。

ほかにも, たとえば温泉地を扱った H. D. Brandt<sup>71)</sup> や M. Geuting<sup>72)</sup> の研究, アイフェル地方を扱った K. G. Gläser<sup>73)</sup>, ヴェラ川地域やリュネブルガーハイデの観光を論じた K. Groeber<sup>74)</sup> や K. Kroß<sup>75)</sup>, バイエリッシャーバルトに関する Ch. Boer<sup>76)</sup>, ゴーリンゲンと付近の観光や観光圏を論じた D. Uthoff<sup>77)</sup> らの精力的な研究が相ついで発表されてきた。また, 都市が観光地として大きな意味をもつことは, 古くから指摘されていたが, J. Maier<sup>78)</sup> は, それをミュンヘンにおいて論じた。西ドイツにおける観光研究の層の厚さがうかがわれる。東ドイツでも, E. Hartsch<sup>79)</sup> や B. Benthien<sup>80)</sup> らによって, 代表的な観光地域の研究がなされてきた。

### c) その他

観光地の類型化の問題は, A. Hettner 以来長い間, 地理学の主要な関心であった。観光地の特徴を明らかにするために, 一般に観光の種類, 宿泊者数, 収容力, 滞在日数, 外国人の割合, 観光強度などが利用されてきたが, その意味についてはあまり議論がなされてこなかった。そのため研究対象の広い地理学では, 問題設定の如何によっては, 観光客の社会構造, 経済的価値, 季節性, 就業や人口構造, 土地所有構造, 農業経営方法などに関する指標の選択が主張されてきた。そこで類型化の地理学的意味の検討が, K. Ruppert と J. Maier<sup>81)</sup>, K. Kulinat<sup>82)</sup> らによって盛んになされるようになった。

一方, 観光地の立地論的研究も, 地理学者の主要な関心であったが, その理論的研究はあまり進められてこなかった。F. Geigant<sup>83)</sup> や H. Todt<sup>84)</sup> の研究などが, その種の研究の代表的なものとしてあげられよう。観光に関する統計が問題点をもつことは, 多くの研究において指摘されてきたが, 観光統計の正確度を検討するような研究<sup>85)</sup>も著わされてきた。また, E. Schlieter<sup>86)</sup>, W. Erikson<sup>87)</sup>, K. Ruppert と J. Maier<sup>88)</sup> らの業績にみられるように, 外国における観光の地理学的研究も急速にその数を増してきた。

## 2) 近接レクリエーション研究

近接レクリエーションに関する地理学的研究の主要な関心は、まずレクリエーション空間の大きさ、構造などの実態把握に向けられた。既に述べたいくつかの業績のほか、A. Hengsbach は<sup>89)</sup>、ベルリンにおいて、初期には鉄道路線の発達がレクリエーション空間の形成に大きな役割を果たしたことを実証した。I. Albrecht は<sup>90)</sup>、交通流の把握とアンケート調査からハンブルクのレクリエーション空間を論じた。K. Ruppert と J. Maier<sup>91)</sup>、R. D. Freitag<sup>92)</sup> らは、さらに、レクリエーション地での自家用車の駐車台数の把握という骨の折れる調査などを通して、ミュンヘンとパリのレクリエーション空間の解明に努めた。その結果、近接レクリエーションは、交通手段の発達の仕方の違いや場所によって異なるが、初期には人口密集地域からおおよそ 30~60 km ほどであったが、現在ではおおよそ 120 km、アウトバーンの発達しているような地域では 250 km ほどの範囲にみられる現象であることや地域によって異なるその構造が明らかにされてきた。

L. Czinki と W. Zühlke の算定<sup>93)</sup>によれば、西ドイツの人々は平均して、自由時間の72%を家あるいは住居の近くで過ごし、18%を週末のレクリエーション、10%を休暇レクリエーションにあてている。別の算定によっても、西ドイツの大都市では約30%の人々が週末に定期的に都市を離れるといわれているが、一般に W. Wehner が<sup>94)</sup>東ドイツで明らかにしたように、その割合は都市の規模が大きいくほど増加する。しかし、E. Fisher<sup>95)</sup>、E. Mulzer<sup>96)</sup>、K. Groeber<sup>97)</sup> らは、ゲッティンゲンなどを例に、近接レクリエーションは中小都市においても盛んであり、大都市より自家用利用者が多いことなど、大都市のそれとは異なる特性をもつことを指摘した。観光地域の住民の近接レクリエーションに関しても、J. Maier と K. Ruppert によって<sup>98)</sup>、その実態が究明されてきた。

一方、レクリエーション空間の構造や特性を供給側の調査から把握しようとする K. H. Bröckl の研究<sup>99)</sup>や、ウィーンのレクリエーション地域を例に、その成立条件を詳細に検討した E. Bernt などの研究<sup>100)</sup>も発表されてきた。

近接レクリエーション研究の遅れた理由の1つは、既にふれたように、その実態把握の困難さにあった。R. Klöpper は<sup>101)</sup>、この現象のさまざまな量的把握法について述べた。また、最近では、近接レクリエーションの若干の現象に関する概観的研究もなされてきた。K. Ruppert と J. Maier は<sup>102)</sup>、別荘の発達、意味やバイエルン州におけるその分布を明らかにし、J. Maier は<sup>103)</sup>、同じくバイエルン州において、レストランの収容力の分布図を作成し、近接レクリエーションや観光にとっての意味を考察した。東ドイツにおいても、先にふれた W. Wehner らを中心として、この種の研究が盛んに進められるようになってきた。まだ観光研究ほどその蓄積はないが、近接レクリエーションに関する、このような多角的な研究の進展によって、その空間構造や地域的意味の解明が進められつつある。

## 3) 地域計画を指向した研究

観光・レクリエーション地理学が、国土や地域計画への寄与という点で応用上の課題をもつことは、1950年代以来、既にみたくいくつかの論文の中でも強く言及されてきた。レクリエーション空間の把握や、それと自然・人文現象との相互作用の把握に、地道な実証的な研究を積み重ねてきた地理学が、

地域計画に有効であることはいうまでもない。西ドイツでは、地理学者の各種地域計画への参画は、想像以上に活発である。既にみた論文以外にも、その必要性を主張し、方法・問題点を整理した論文が R. J. Schneider<sup>104)</sup> や J. Maier<sup>105)</sup> らによって発表されてきた。

実際、西ドイツでも、観光・レクリエーション現象の発達と多様化に付随して、環境破壊や地域経済上の問題が起こってきた。たとえば、キャンプ場や別荘地などは、一般に景観形成が顕著で、環境破壊をもたらしても一方、多くのインフラストラクチャー施設を必要とし、その上経済上の利点はあまりないことなどが、いくつかの論文によって指摘されてきた。また観光・レクリエーション的土地利用は、一義的には農業用地であったりする場合も多く、土地利用上の競合がおきやすい。そこで、合理的なレクリエーション地域計画のために、各種の研究がなされるようになった。たとえば、公共投資のあり方を扱った J. Maier と K. Ruppert の研究<sup>106)</sup>、オランダの合理的な観光・レクリエーション地域の計画を論じた Th. Quené の研究<sup>107)</sup>、アルプスやリュネブルガーハイデでそれを論じた W. Danz<sup>108)</sup> や H. Müller<sup>109)</sup> の研究などがある。

また、地域計画の必要性などから、様々な分野で発達してきた観光研究を統合化しようとする気運が醸成されてきた。ハノーバーの Akademie für Raumforschung und Landesplanung などは、その具体化を促進してきた代表的なものである。この機関は、1963年にその研究報告にいくつかのレクリエーション研究を収録して以来、その研究の必要性を重視し、1969年と1972年には空間と観光に関する特集号を出版した<sup>110)</sup>。これらの中には、地域計画や地理学的観点からの研究のほか、医学、心理学、社会学、経済学、農学などの分野の様々なアプローチの研究が含まれており、観光研究の統合化への努力が払われている。

地域計画と結びついて、レクリエーションのための景観評価も盛んに論議されるようになった。この種の評価は、個人あるいは社会集団の欲求や好みが異なるため、客観的评价が難しい。主観的な尺度にもとづく研究はいくつかなされてきたが、それらは大抵、一定の条件のもと、あるいはある地域に限定されたもので、他の場合での類推解釈には役立たない。

しかし、この種の研究をできるだけ一般的なものにしようとする努力もいくつかなされてきた。H. Kiemstedt<sup>111)</sup> は、とりわけ自然地理的要因を重視しながら、一連の景観評価に関する研究を行ってきた。彼は、森林・湖と河川の緑、土地の起伏、土地利用、気候をレクリエーションにとっての重要な自然的要素として取り上げ、実際の調査で得られた経験的価値基準から、算定式を案出し、ハノーバー付近の自然の価値を評価した。

一方、A. Menke は<sup>112)</sup>、直接・間接の観光施設を主観的に評価することによって、地域のもつ観光的価値を把握する方法を示した。A. Scamoni と G. Hofman は<sup>113)</sup>、散歩道の状態、地形の多様性、樹種、起伏、大気環境 (Reizklima)、空気の清澄さ、騒音、美的価値や、避難小屋・ベンチ・遊び場などの設置状況等を組み合わせた指数を考案し、それに宿泊地点からの時間的近接性を加味して、総合的に景観を評価する方法を検討した。E. Hartsch は<sup>114)</sup>、経済的要因の検討から、レクリエーション・ポテンシャルを把握する方法について考察した。

そのほか、人口ポテンシャル、インフラストラクチャー、交通条件などを重視した評価法も試みら

れているが、総括的な評価法の確立に必ずしも成功しているとはいえないようである。地理学的な景観測定法を論じた R. Marten<sup>115)</sup> や、景観評価の研究を整理した J. Maier<sup>116)</sup> も、まだこの種の研究が少なく、研究法の確立のためには、多くの事例研究の積み重ねが必要なことを指摘している。

## V お わ り に

ドイツでは、観光・レクリエーション現象の研究の必要性は、既に前世紀後半から今世紀初期に認識されていた。初期には、他の学問分野、とくに経済学的観光研究の影響を受けながら、集落形態論の観点から研究がなされてきた。1939年、H. Poser が、観光を空間現象としてとらえ、観光と結びついた地域的特性と、観光と環境との間の交互作用を明らかにしようとする意欲的な、実証的研究を発表した。これは、その後のドイツの観光・レクリエーション地理学の展開に寄与するところが大きかった。

第2次世界大戦後、西ドイツでは、観光・レクリエーション現象に関する地理学的研究が急速に発達してきた。事例研究の蓄積とともに、W. Christaller らによって、経済地理学的観点からその研究を体系化しようとする主張がなされた。その後、K. Ruppert と J. Maier によって、それを社会地理学的フレームワークで整理しようとする一連の試みがなされてきた。一方、とくに1960年代以降、観光・レクリエーション地理学が扱う現象とその研究法が多様化した。観光特性にもとづく地域的特性を論じた研究や、景観形成論的研究はいうに及ばず、様々な近接レクリエーション現象に関する研究や、地域計画を指向した研究が盛んになり、景観評価なども論議されるようになった。

ところで、西ドイツにおけるそれらの研究成果を眺めてみると、ある地域における観光現象の分布や類型化を扱ったものと、景観形成論的研究の多いことが特色である。K. Ruppert と J. Maier は、その著書の中で、概観的研究の不足を指摘している。これは、地域的個別研究を位置づけるためには、より大きな地域での研究が必要であるということばかりでなく、観光・レクリエーション現象の空間組織とその地域的意味を明確にする視点が欠けていたことを意味すると考えられる。また彼らは、地理学、すなわち社会地理学は人間の欲求や行動様式の空間的帰結にかかわる科学であるという立場をとっているが、その空間的作用の研究がまだ不十分であることをも認めている。

ドイツの人文地理学は独自の、輝かしい伝統をもつこともあって、イギリスや合衆国で盛んな空間論的研究や行動科学論的研究法の導入は早くはなかった。しかし近年では、地域計画への参画などの理由もあって、現象それ自身の空間的特性に関する研究が多くなってきた。一部では、計量的手法を用いて、現象それ自身の空間的法則性を解明しようとする研究の必要性も主張されてきた。とはいえ、分布を重視する研究法や、環境論的範疇に属する地道な地域研究が、ドイツ人文地理学の本領であり、この種の研究成果は非常に多い。またこのような研究にもとづく知識や総合的価値判断の基準が応用的な面でも重要であることは自明である。西ドイツにおける観光・レクリエーション地理研究が今後どのような道を歩むか予測しがたいが、いずれにせよ世界的にもこの分野の研究の発達に大きな役割を果たすものと思われる。

本稿では、長い歴史をもつ西ドイツの観光・レクリエーション地理学の発達について大胆な展望を試みた。浅学のため、重要な論文を見過ごしたり、逸したりしたことも考えられる。ご指摘、ご批判を頂ければ幸いである。

脱稿にあたり、末筆ながら、1972年から1974年に至るほぼ2年間のミュンヘン大学経済地理学研究所への留学の間、公私ともにお世話下さった K. Ruppert 教授、F. Schaffer 教授 (現アウグスブルグ大学)、J. Maier 教授 (現バイロイト大学) をはじめ、当時の研究所のスタッフの方々に深く感謝申し上げたい。また、留学を勧めて下さり、研究活動を絶えず励まして下さった故・尾留川正平先生と山本正三先生に厚く御礼申し上げる。さらに、ミュンヘン大学への留学を可能にして下さった DAAD (西ドイツ政府学術交換奉仕会) に対しても、深く感謝の意を表する。

## 註・参考文献

- 1) わが国では観光地理学という術語が定着しているが、観光とは一般にレクリエーション活動の一形態と考えられている。近年この種の研究が進むにつれて、観光地理学という概念では不十分な面も生じてきたので、ここではこの種の研究を観光・レクリエーション地理学とよぶ。この分野の体系化を試みているミュンヘン大学経済地理学研究室の K. Ruppert らは、「余暇活動の地理学」という術語を提唱している。日本でも、近年高橋伸夫らは、浜松市における余暇圏の構造を扱った論文 (筑波大学人文地理学研究, II, 95~108, 1978) のなかで余暇活動の地理学という言葉を使用している。
- 2) W. Christaller (1955): Beiträge zu einer Geographie des Fremdenverkehrs, *Erdkunde*, Bd. 9, H. 1, 1~19.
- 3) K. Ruppert u. J. Maier (1970): Zur Geographie des Freizeitverhaltens, *Münchener Studien zur Sozial- u. Wirtschaftsgeographie*, Bd. 6.
- 4) F. Jülg (1965): Praktische Hinweise für wissenschaftlichen Arbeiten in der Fremdenverkehrsgeographie, *Festschrift L. G. Scheidl zum 60. Geb.*, Teil. I, 56~67, Wien.
- 5) P. Defert (1952): Les fondements géographiques du tourisme, *Zeitschrift für Fremdenverkehr*, Jg. 7, Nr. 4.
- 6) P. Lavery (1971): *Recreational Geography*, Vancouver.
- 7) K. C. McMurry (1954): Recreational Geography, in *American Geography—Inventory and Prospect*—ed. by P. E. James and C. F. Jones, 251~256, Syracuse U. P.
- 8) R. I. Wolfe (1964): Perspective on Outdoor Recreation—A bibliographical Survey—, *Geogr. Rev.*, 54, 203~238.
- 9) 青木栄一・山村順次 (1976): 日本における観光地理学研究の系譜, *人文地理*, 28, 57~80.
- 10) たとえば、前者については、M. Clawson (1960): *Land for Recreation*, in *Land for the Future* ed. by A. Ackerman, M. Clawson and A. Harris, 124~193, Baltimore. 後者については、Outdoor Recreation Resources Review Commission (1962): *Outdoor Recreation for America*, Washington などが代表的なものである。
- 11) 近年の西ドイツにおける地理学の研究動向については、森川洋 (1972): 西ドイツ・オーストリーにおける地理学の研究動向について, *人文地理*, 24, 57~84. 藤内芳彦 (1972): 『社会地理学論争』と人文地理学, *大阪市大人文研究*, 23, 606~631, くに詳しく述べられている。
- 12) H. Robinson (1976): *A Geography of Tourism*, 3~16, London.
- 13) K. Ruppert u. J. Maier (1970): 前掲 3), S. 20.
- 14) J. G. Kohls (1841): *Der Verkehr und die Ansiedlungen der Menschen in ihrer Abhängigkeit von der Gestaltung der Erdoberfläche*, Dresden.
- 15) R. Samolewitz (1960): Hinweise auf die Behandlung des Fremdenverkehrs in der wissenschaftlichen, insbes. geographischen Literature, *Zeitschrift für Wirtschaftsgeographie*, H. 4, S. 112.
- 16) A. Hettner (1902): Die wirtschaftlichen Typen der Ansiedlungen, *Geographische Zeitschrift*, Jg. 8, 90~98.

- 17) K. Hassert (1907): *Die Städte geographische betrachtet*, Leipzig.
- 18) J. Stradner (1917): *Der Fremdenverkehr*, Graz.
- 19) R. Samolewitz (1960): 前掲 15), S. 113.
- 20) K. Spitz (1919): *Die geographische Bedingungen und Wirkungen des Fremdenverkehrs in Tirol*, Diss., Wien.
- 21) R. Samolewitz (1960): 前掲 15), S. 115.
- 22) G. Wegener (1929): *Der Fremdenverkehr in geographischer Betrachtung*, in *Fremdenverkehr*, Berlin.
- 23) A. Grünthal (1934): *Probleme der Fremdenverkehrsgeographie*, Schriftenreihe des Forschungsinstituts für Fremdenverkehr (Berlin), H. 9.
- 24) A. Grünthal (1935): *Allgemeine Geographie der Kurorte*, *Archiv für den Fremdenverkehr*, Jg. 5, Nr. 1.
- 25) A. Borman (1931): *Die Lehre vom Fremdenverkehr*, Berlin.
- 26) F. W. Ogilvie (1933): *The Tourist Movement*, London.
- 27) R. Glücksmann (1935): *Allgemeine Fremdenverkehrskunde*, Bern.
- 28) H. Poser (1939): *Geographische Studien über den Fremdenverkehr in Riesengebirge*, Abh. d. Ges. d. Wiss. zu Göttingen, H. 20.
- 29) F. Geigant (1962): *Die Standort des Fremdenverkehrs—Eine sozialökonomische Studie über die Bedingungen und Formen der räumlichen Entfaltung des Fremdenverkehrs—*, Schriftenreihe des Institut für Fremdenverkehr (Uni. München), H. 17, S. 18.
- 30) W. Hunziker u. K. Krapf (1942): *Grundriß der allgemeinen Fremdenverkehrslehre*, Zürich.
- 31) E. Winkler (1944): *Die Landschaft der Schweiz als Voraussetzung des Fremdenverkehrs*, Arbeiten aus dem geographischen Institut der ETH (Zürich).
- 32) H. Carols (1946): *Begleittext zur wirtschaftsgeographischen Karte der Schweiz*, *Geographica Helvetica*, Jg. 1.
- 33) W. Strzygowski (1942): *Erholungsräume und Reiseziel der Bevölkerung Wiens*, *Mitt. d. Geogr. Gesell. Wien*, Bd. 85, H. 7~10, 321~333.
- 34) W. Voigt (1951): *Fremdenverkehr und Wirtschaftsgeographie*, *Der Fremdenverkehr*, Jg. 3, H. 10.
- 35) W. Christaller (1955): 前掲 2).
- 36) H. Hahn (1958): *Die Erholungsgebiete der Bundesrepublik—Erläuterung zu einer Karte der Fremdenverkehrsorte in der deutschen Bundesrepublik—*, Bonner Geographische Abhandlungen, H. 25.
- 37) H. Jäger (1953): *Der kulturgeographische Strukturwandel des Kleinen Walsertales*, Münchner Geographische Heft, H. 1.
- 38) W. Wenserski (1953): *Zur Siedlungs- und Wirtschaftsgeographie der Bodeorte Ostholsteins*, Schr. d. Geogr. Inst. d. Uni. Kiel, Sonderband.
- 39) G. Niemaier (1954): *Entwicklung zu maritimen Heilbädern, —Zur Wirtschafts- und Sozialgeographie der Ostfriesischen Inseln—, Gemeinschaft und Politik*, Jg. 2, H. 8.
- 40) Ch. Jost (1955): *Der Einfluß des Fremdenverkehrs auf Wirtschaft und Bevölkerung der Landschaft Davos*, Schweizerische Beiträge zur Verkehrswissenschaft, H. 40, Bern.
- 41) A. Weber (1958): *Geographie des Fremdenverkehrs im Fichtelgebirge und Frankenwald*, *Mitt. d. Fränk. Geograph. Ges.* Jg. 5, 35~109.
- 42) R. Klöpffer (1955): *Das Erholungswesen als Bestandteil der Raumordnung und als Aufgabe der Raumforschung*, *Raumforschung und Raumordnung*, Jg. 13, H. 4, 209~216.
- 43) Chr. Borchardt (1957): *Die Wohn- und Ausflugsgebiete in der Umgebung Münchens—Eine sozialgeographische Skizze—, Berichte zur deutschen Landeskunde*, Bd. 19, H. 2, 181~187.
- 44) これは、地域によって異なるが、その面積 300㎡位、通常公有地の低額賃貸地で、その呼称は、「恵まれない人々が土に親しみ、健康を増進するために、小さな庭あるいは菜園を所有する機会が与えられるべき」と提唱したライブツィヒの医師・D. Schreber に由来する。
- 45) E. Johannes (1955): *Entwicklung, Funktionswandel und Bedeutung städtischer Kleingärten*,

- Schriften d. Geogr. Inst. d. Uni. Kiel, Bd. 15, H. 3.
- 46) H. J. Knebel (1960): *Soziologische Strukturwandlungen im modernen Tourismus*, Stuttgart.
- 47) A. E. Pöschel (1962): *Fremdenverkehr und Fremdenverkehrspolitik*, Berlin.
- 48) P. Bernecker (1962): *Grundlagenlehre des Fremdenverkehrs*, Wien.
- 49) R. Samolewitz (1960): 前掲 15), H. 4, 112~116. und H. 5, 144~148.
- 50) R. Rungaldier (1962): Geographie und Fremdenverkehr, *Der österreichische Betriebswirt.*, Jg. 10, H. 2, 85~92.
- 51) F. Jülg (1965): 前掲 4).
- 52) G. Jacob (1968): Der gegenwärtige Stand und die Aufgaben der Geographie des Fremdenverkehrs, *Wiss. Abh. d. Geograph. Ges. d. DDR*, Bd. 6, 17~27.
- 53) K. Ruppert u. J. Maier (1970): Zum Standort der Fremdenverkehrsgeographie — Versuch eines Konzepts—, *Münchener Studien zur Sozial- und Wirtschaftsgeographie*, Bd. 6, 9~36.
- 54) K. Ruppert u. F. Schaffer (1969): Zur Konzeption der Sozialgeographie, *Geographische Rundschau*, H. 6, 205~214.
- 55) W. Christaller (1966): Wochenendausflüge und Wochenendsiedlungen, *Der Fremdenverkehr*, Jg. 18, Nr. 9, 6~9.
- 56) K. Ruppert u. J. Maier (1969): *Naherholungsraum und Naherholungsverkehr — Eine Literaturstudie unter besonderer Berücksichtigung wirtschafts- und sozialgeographischer Aspekte—*, Starnberg.
- 57) K. Ruppert u. J. Maier (1970): Naherholungsraum und Naherholungsverkehr — Geographische Aspekte eines speziellen Freizeitverhaltens—, *Münchener Studien zur Sozial- und Wirtschaftsgeographie*, Bd. 6, 55~78.
- 58) W. Ritter (1965): Fremdenverkehrsgebiete in Europa, in *Festschrift zum 60. Geburtstag von L. G. Scheidl*, Teil 1, 288~306, Wien.
- 59) J. Maier (1973): Freizeitverhalten und Tourismus in Europa, in *Bertelsmann Lexikon, Länder und Völker, Teil Europa* Bd. 1, 306~311, Gütersloh.
- 60) M. T. Brink (1965): Die Bedeutung des Fremdenverkehrs in den Kreisen der BRD, *Informationen*, Jg. 15, 149~166.
- 61) E. Grötzbach (1968): Die Entwicklung der bayerischen Fremdenverkehrsgebiete in den letzten 40 Jahren, *Mitt. d. Geograph. Ges. München*, Bd. 53, 267~292.
- 62) R. Klöpffer (1974): *Die räumliche Struktur des Angebots von „Urlaub auf dem Bauernhof“*, Schriftenreihe des AID, H. 179.
- 63) K. Ruppert (1962): *Das Tegernseer Tal— Sozialgeographische Studien im oberbayerischen Fremdenverkehrsgebiet—*, Münchner Geographische Hefte, H. 23.
- 64) たとえば, K. Ruppert (1964): Almwirtschaft und Fremdenverkehr in den Bayerischen Alpen, in *Tagungsbericht und wiss. Abh. d. Deutschen Geographen Tages in Heidelberg 1963*, 325~331; K. Ruppert (1967): Beiträge zu einer Fremdenverkehrsgeographie—Beispiel, Deutsche Alpen —, *Wiss. Abh. d. Geograph. Ges. d. DDR*, Bd. 6, 157~165.
- 65) A. Kröner (1968): *Grindelwald, die Entwicklung eines Bergbauernorfes zu einem internationalen Touristenzentrum—Ein Beitrag zum Problem des kulturgeographischen Wandels alpiner Siedlungen—*, Stuttgarter Geograph. Studien, Bd. 74.
- 66) J. Maier (1970): *Die Leistungskraft einer Fremdenverkehrsgemeinde — Modellanalyse des Marktes Hindelang/Bayer. Allgäu—*, WGI Berichte zur Regionalforschung, Bd. 3.
- 67) W. Heller (1970): *Der Fremdenverkehr im Salzkammergut—Studie aus geographischer Sicht—*, Heidelberger Geograph. Arbeiten, H. 29.
- 68) K. Kulinat (1969): *Geographische Untersuchungen über den Fremdenverkehr der Niedersächsischen Küste*, Voröff. d. Niedersächs. Inst. f. Landeskunde und Landesentwicklung a. d. Uni. Göttingen, Bd. 92.
- 69) S. Diekman (1963): *Die Ferienhaussiedlungen Schleswig-Holsteins — Eine siedlungs- und sozialgeographische Studie—*, Schrift. d. Geograph.

- Inst. d. Uni. Kiel, Bd. 21, H. 3.
- 70) J. Dodt (1967): *Der Fremdenverkehr im Moseltal zwischen Trier und Koblenz*, Forsch. zur deutschen Landeskunde, Bd. 162.
- 71) H. D. Brand (1967): *Die Bäder am Oberharz —Eine fremdenverkehrsgeographische Untersuchung—*, Schrift. zur Landeskunde und Landesentwicklung Niedersachsens, Bd. 84.
- 72) M. Geuting (1972): *Die Kur- und Erholungs-orte in der Rhön—Ein methodischer Beitrag zur Fremdenverkehrsgeographie—*, Mainfränkische Studien, Bd. 4.
- 73) K. G. Gläser (1970): *Der Fremdenverkehr in der Nordwesteifel und seine Kulturgeographischen Auswirkungen*, Aachener Geographische Arbeiten, H. 2.
- 74) K. Groeber (1970): *Der Fremdenverkehr im Bergland des unteren Werratales*, *Neues Archiv für Niedersachsen*, Bd. 19, H. 2, 141~154.
- 75) E. Kroß (1970): *Fremdenverkehrsgeographische Untersuchung in Lüneburger Heide*, Schrift. zur Landeskunde und Landesentwicklung Niedersachsens, Bd. 94.
- 76) Ch. Boer (1962): *Die Auswirkung des Fremdenverkehrs auf die wirtschaftliche Struktur der Gemeinden Regen, Bodenmais und Bayer. Eisenstein*, *Mitt. Geogr. Ges. München*, Bd. 47, 21~70.
- 77) D. Uthoff (1970): *Der Fremdenverkehr im Sollingen und seinen Randgebieten*, Göttinger Geogr. Abh., H. 52.
- 78) J. Maier (1972): *München als Fremdenverkehrsstadt — Geographische Aspekte des Freizeitverhaltens in einer Großstadt—*, *Mitt. d. Geogr. Ges. in München*, Bd. 57, 51~91.
- 79) E. Hartsch (1963): *Der Fremdenverkehr in der Sächsischen Schweiz*, *Wiss. Veröff. d. dt. Instituts für Länderkunde*, H. 20, 343~490.
- 80) B. Benthien (1968): *Siedlungsgeographische Auswirkungen des Fremdenverkehrs an der Ostseeküste der DDR*, *Wiss. Abh. d. Geogr. Ges. der DDR*, Bd. 6, 33~45.
- 81) K. Ruppert u. J. Maier (1970): 前掲 53).  
K. Ruppert u. J. Maier (1969): *Geographie und Fremdenverkehr*, *Forsch. u. Sitz. berichte d. Akad. f. Raumforschung und Landesplanung Hannover*, Bd. 63, 78~89.
- J. Maier (1970): *Probleme und Methoden zur sozialgeographischen Charakterisierung und Typisierung von Fremdenverkehrsgemeinden*, *Geographical Papers (Zagreb)*, N. 1, 145~154.
- 82) K. Kulinat (1972): *Die Typisierung von Fremdenverkehrsorten—Ein Diskussionsbeitrag—*, *Göttinger Geogr. Abh.* H. 60, 521~538.
- 83) F. Geigant (1962): 前掲 29).
- 84) H. Todt (1965): *Über die räumliche Ordnung von Reisezielen*, *Beiträge zur Fremdenverkehrsforschung*, H. 9.
- 85) D. Uthoff (1969): *Untersuchungen über den Genauigkeitsgrad der Fremdenverkehrsstatistik*, *Neues Archiv für Niedersachsen*, Bd. 18, H. 4, 384~360.
- 86) E. Schlieter (1968): *Viareggio—Die geographischen Auswirkungen des Fremdenverkehrs auf die Seebäder der nordtoskanischen Küste*, *Marlburger Geogr. Schrift.* H. 33.
- 87) W. Eriksen (1970): *Kolonisation und Tourismus in Ostpatagonien*, *Bonner Geogr. Abh.* H. 43.
- 88) K. Ruppert u. J. Maier (1971): *Der Tourismus und seine Perspektiven für Südosteuropa*, *WGI Berichte zur Regionalforschung*, Bd. 6.
- 89) A. Hengsbach (1965): *Die Anfänge des Berliner Nahverkehrs*, *Berichte zur deutschen Landeskunde*, Bd. 55, H. 2, 321~340.
- 90) I. Albrecht (1967): *Der Wochenendverkehr der Hamburger Bevölkerung*, Teil A, hrsg., vom Inst. f. Verkehrswiss. a. d. Uni. Hamburg.
- 91) K. Ruppert u. J. Maier (1970): *Der Naherholungsverkehr der Münchner*, *Mitt. d. Geogr. Ges. München*, Bd. 55, 31~44.
- 92) R. D. Freitag (1970): *Naherholungsraum und Naherholungsverkehr—Beispiel Paris—*, *Münchener Studien zur Sozial- und Wirtschaftsgeographie*, Bd. 6, 79~88.
- 93) L. Czinki u. W. Zühlke (1966): *Erholung und Regionalplanung*, *Raumforschung und Landesplanung*, H. 4, 155~164.
- 94) W. Wehner (1966): *Zur Bewertung poten-*



- tieller Naherholungsbereich der Agglomerationen der DDR, *Wiss. z. d. Päd. Hochschule Dresden*, 53~61.
- 95) E. Fisher (1969): Beiträge zur Kenntnis des Göttinger Ausflugsverkehrs, *Neues Archiv für Niedersachsen*, Bd. 17, H. 3, 207~229.
- 96) E. Mulzer (1971): Grünflächen und Naherholungsgebiete im Ballungsraum Nürnberg-Fürth-Erlangen, *Mitt. d. Fränkischen Geogr. Ges.*, Bd. 18, 139~162.
- 97) K. Groeber (1973): *Die Naherholungsregionen der niedersächsischen Städte Göttingen, Heidelberg und Oldenburg*, Diss. d. Uni. Göttingen.
- 98) J. Maier u. K. Ruppert (1973): Zur Naherholung der Bevölkerung im Fremdenverkehrsgebiet—Ein Beitrag zu einer Allgemeinen Geographie des Freizeitverhaltens—, *Informationen*, Jg. 23, Nr. 17, 383~398.
- 99) K. H. Bröckl (1970): Der Wochenendausflugsverkehr im Fichtelgebirge, *Mitt. d. Fränkischen Geogr. Ges.*, Bd. 17, 265~280.
- 100) E. Bernt (1966): Der Erholungsraum der Wiener, *Mitt. des österr. Instituts für Raumforschung*, Nr. 92, 199~222.
- 101) R. Klöpffer (1972): Zur quantitativen Erfassung räumlicher Phänomene der Kurzerholung, *Göttinger Geogr. Abh.*, H. 60, 539~548.
- 102) K. Ruppert u. J. Maier (1971): Der Zweitwohnsitz im Freizeitraum —raumrelevanter Teilaspekt einer Geographie des Freizeitverhaltens—, *Informationen*, Jg. 21, Nr. 6, 135~157.
- 103) J. Maier (1973): Die Sitzplätze in Gaststätten —Ein Indikator auf der Angebotsseite für Freizeit und Erholung, *Informationen*, Jg. 23, Nr. 9, 179~192.
- 104) R. J. Schneider (1968): *Die Möglichkeiten und Probleme einer regionalen touristischen Planung*, Berner Studien zum Fremdenverkehr, H. 5.
- 105) J. Maier (1971): Methoden und Probleme von Fremdenverkehrsprognosen, *WGI Berichte zur Regionalforschung*, Bd. 6, 33~48.
- 106) J. Maier u. K. Ruppert (1973): Geographische Aspekte Kommunalen Initiativen im Freizeitraum, *Mitt. d. Geogr. Ges. in München*, Bd. 58, 19~37.
- 107) Th. Quené (1967): Raumplanung in Fremdenverkehrs- und Erholungsgebieten der Niederlande, *Ber. z. Raumforschung u. Raumplanung*, Jg. 11, H. 4, 13~19.
- 108) W. Danz (1970): *Aspekte einer Raumordnung in den Alpen*, WGI Berichte zur Regionalforschung, Bd. 1.
- 109) H. Müller (1968): Probleme des Fremdenverkehrs in der Lüneburger Heide aus der Sicht der Raumordnung und Landesplanung, *Neues Archiv für Niedersachsen*, Bd. 17, H. 3, 200~206.
- 110) Forschungs- und Sitzungsberichte der Akademie für Raumforschung und Landesplanung: Bd. 53, *Wissenschaftliche Aspekte des Fremdenverkehrs (Raum und Fremdenverkehr 1)*, 1969; Bd. 73, *Freizeit und Erholungswesen als Aufgabe der Raumordnung (Raum und Fremdenverkehr 2)*, 1972; Bd. 76, *Zur Landschaftsbewertung für die Erholung (Raum und Fremdenverkehr 3)*, 1972.
- 111) H. Kiemstedt (1967): *Zur Bewertung der Landschaft für die Erholung*, Beiträge zur Landschaftspflege, Sonderheft, 1.
- 112) A. Menke (1965): *Der Einfluß des Fremdenverkehrs auf die Entwicklung ländlicher Räume*, Diss., TH Hannover.
- 113) A. Scamoni u. G. Hofmann (1969): Verfahren zur Darstellung der Erholungswertes von Waldgebieten, *Archiv für Forstwesen*, Bd. 18, H. 3, 283~300.
- 114) E. Hartsch (1968): Gedanken zur Frage der Bewertung des landschaftlichen Erholungspotentials, *Petermanns Geogr. Mitt., Ergänzungsheft 271*, 199~205.
- 115) R. Martens (1970): Probleme einer Messung der geographischen Landschaft, *Geogr. Zeitschrift*, Jg. 58, H. 2, 138~145.
- 116) J. Maier (1972): Zur Bewertung des landschaftlichen Erholungspotentials aus der Sicht der Wirtschafts- und Sozialgeographie, *Forschungs- und Sitzungsberichte der Akademie für Raumforschung und Landesplanung*, Bd. 76, 9~20.

## The Trend of Geographical Studies on Recreation and Tourism in West Germany

Hideya ISHII

The purpose of this paper is to review the development of geographical studies on recreation and tourism in West Germany. Chapter II deals with the trend of such studies before World War 2. Chapter III covers the postwar revival of interest in this field and some of the attempts to develop a systematic recreational geography after 1960. Chapter IV discusses various recent trends in the development of this area of study.

In Germany, the necessity of studying the phenomena of recreation and tourism was already recognized at the turn of the century. At first, these geographical studies were considered as a part of settlement geography, or were approached from the viewpoint of transportation geography and influenced by economic studies on tourism. In 1939 H. Poser published his major work on tourism in Riesengebirge, in which he regarded tourism in a spatial context, and tried to clarify the regional characteristics of tourism and the relationship between human and physical phenomena. This paper made a great contribution to the subsequent development of geographical research on recreation and tourism in West Germany.

After World War 2, geographical research in this area began to advance rapidly. As the case studies accumulated, so the need for systematization increased. W. Christaller and others insisted on placing them within the field of economic geography. They took the geography of tourism to be the study of the location of resorts as a whole. Since then, K. Ruppert and J. Maier have made a series of attempts to derive a methodology for this field of study within the framework of social geography. Recreational geography was defined by them as being the study of the spatial organization and the process of formation of recreation activities, which are a fundamental function of man in an industrial society. They have played an important role in establishing the geography of recreation and tourism, not only through theoretical and methodological studies, but also many empirical studies.

On the other hand, especially since the 1960's, the scope of recreational geography and the methods of its study have become diverse. Not only are there many studies on the interaction between recreational activities and regional characteristics, or landscapeformation, but also extensive studies on the phenomenon of weekend recreation and research oriented to regional planning have been carried out. Recently landscape evaluation for the purpose of recreation has also been discussed.

Generally speaking, however, in West Germany there are abundant studies which deal with the characteristics and classification of the recreational region in a small, limited area, or with its landscape formation. K. Ruppert and J. Maier admit that as far as the macro-scale analysis of spatial organization of recreation or of the spatial effects of different socio-economic groups are concerned, such studies have not been sufficient. In fact, since German human geography has her own strong tradition, the introduction of methods based on spatial theory or behavioral science, popular in Great Britain, the U. S. A. and other countries, has not met with much enthusiasm. But recently the amount of research which deals with the spatial characteristics of the recreation phenomenon itself has increased, partly as a result of the growing need to participate in regional planning. Of course, detailed regional studies based on environmental theory are also numerous. It is clear that the knowledge derived from, and an overall value judgement based on such studies are also very important in the application of regional planning.

In this paper, the author makes an attempt to review the development of geographical studies on recreation and tourism in West Germany, which has a brilliant and strong tradition also in this field. It is possible that some important papers have been overlooked or disregarded. Nevertheless, this review by a foreigner may have some significance.

From 1972 to 1974, I had an opportunity to study at Wirtschaftsgeographisches Institut der Universität München. I extend my gratitude to Prof. Dr. K. Ruppert, Prof. Dr. F. Schaffer (at present of Augsburg Uni.) and Prof. Dr. J. Maier (at present of Bayreuth Uni.) and the staff of the institute for much kindness and assistance during this period. I am also grateful to the late Prof. Dr. S. Birukawa and to Prof. Dr. Sh. Yamamoto for their advice with regard to my study in West Germany and encouragement for my research. I should also like to acknowledge the DAAD (Deutscher Akademischer Austauschdienst) for their financial assistance during my stay in München.